

# 北 鯨 会

## ニュースレター

No. 12



2017年11月  
(名古屋工業大学同窓会北海道支部)

同窓会北海道支部では年1回支部総会を開催し会員の親睦をはかっています。しかし、北海道は広いので全員が集まるのは困難な状況にあります。そこで約50名の同窓生の相互理解を広めるため、ニュースレターを発行しています。おかげさまで今回12号を発行することができました。これも皆様のおかげと感謝します。

以下に同窓生の情報を掲載します。

## 同窓生情報

氏名（敬称略）（卒業年・学科記号、現在の居住地）で、卒業年順に記載されています。

### 佐藤 昌治（M40、苫小牧市）

#### “近況 後期高齢者になりました。”

佐藤昌治です。名工大機械工学科には昭和36年入学40年卒業です。地元のトヨタ自動車に入社し、平成8年北海道苫小牧市のトヨタ自動車北海道に転籍し退職し、そのまま北海道に住んでいます。約20年になります。

北海道の夏が快適なのであの猛暑の豊田市に戻ろうとは思いませんでした。秋には苫小牧市に家を新築し、新居に引っ越しする直前に豊田市の家も売れました。今でも豊田市には行く機会があり自分の住んでいた家の近くを通ることがあります。なんか変な感じです。

北海道で新しく始めたことは、乗馬とお茶と居合です。北海道が、気にいった点は、もちろんスキーが気楽にできることが一番です。スキーの仲間ができ週2回から3回でかけます。乗馬は妻が米国駐在中にやっており時々大会などを見みにゆきました。

苫小牧でも近くに乗馬を教えるところがあり私だけならうことにしました。トレッキングといって一般の野道をつかう競技怪にも参加できる程度にはのれるようになりました。ときには暴走され、落馬も何回もしました。ひどいときな1週間ほど入院したこともありました。3、4年目には、調教された馬がいなくなり（馬主が、本州の教室に高く売り捌き、我々はいつも未調教の馬ばかりに乗るようになり）残念ながらやめざるをえなくなりました。

次に始めたのは“居合”です。私は高校時代に学校の剣道部に入部して初段、大学で3段 苫小牧の体育館で“無限神刀流”の先生がいるとゆう新聞記事を見て体育館にでかけ入門させていただきました。週1日練習で2時間くらいでした。最後は4段の免状をいただきました。

最後はお茶です。法事に名古屋に何度もでかけました。必ずお茶を出され、見様見真似でいただいていた。すこしは勉強しなくてはと家内に勧められ丁度新聞に“生徒募集”がのっていました。“男の手前”でびったりです。お部屋で待っていますと入ってくる生徒はなんと知った人ばかりです。同じ団地の人が2人、残りの一人はスキーの仲間 びっくりしました。

### 宮入 紀行（F40、岩見沢市）

卒業後9年間マツダに勤務された後、家業を継ぐため、北海道岩見沢市に戻られました。退職後フィリピンセブ島に移住されて7年間英語の勉強をしておられました。平成26年に日本に戻られました（ごきそ」2017年3-4号より転載）。

### 高田忠彦（Y41、江別市）

#### 「ローテク三昧」その3

〈Low テクの中の High テク〉

21世紀はナノテク時代だという。そして、マスメディアから流れるナノテクは、分子レベルの物質を作ったりシステムとするハイテクばかりだ。後期高齢者の「老テク」とは無縁のようではあるが、伝統的な技術がないがしろにされるのは面白くない。

流行に逆らい、生きた化石と言われてもプライドがある。ローテクに潜んでいるハイテクを探してみよう。すると、オールドセラミックスと呼ばれるやきものやガラスの世界では、ナノテクらしき技術がさり気なく使われている。

その一つに「染付け」という絵付けの技法がある。絵具には呉須を使うが、コバルトを主成分とする天然鉱物だ。呉須は細かく磨れば磨るほど発色が良く、描いた絵や線の輪郭が鮮やかになるという。

一方、物質は細かいほど溶けやすく、反応しやすくなる。この常識に従えば、細かくした呉須は釉薬に溶け出し、反応しやすくなる。そうすると、呉須で描いた線や絵は滲み、その輪郭は逆に不鮮明になって然るべきである。

この常識に反する呉須の特性は、呉須を細かくすりつぶしてナノで表わされる大きさにすることによって発現する。したがって、染付けの技法は、今流に言えばナノテクそのものである。

また、この会の山岡君が得意とする釉薬の一つに辰砂釉がある。真赤な色調が特徴で、その名称は水銀鉱の辰砂に由来する。この真赤な発色は、釉薬に分散する銅のコロイド状粒子に因るとされている。銅メダルの金属銅からは想像できない発色である。

伝統的なガラスの世界にあっては、ワインカラーのベネチアングラスの技術がある。この鮮やかな赤は、金のコロイド状粒子が醸すという。この金赤を発明した職人は、黄金色に輝くグラスを夢見て金を使ったと思われる。化学的にも安定な金が真赤なワインカラーに変身するとは、さぞかし驚いたに違いない。

現代人がこれらの技術を開発したとしたら、マスメディアはどのように報ずるだろうか。「ナノテクノロジーによって新たな絵付け法を開発!」、「辰砂釉と呼ぶ鮮やかな真赤な銅釉を開発—釉にナノサイズの金属銅を生成させることに成功」、「ナノ特性のイタズラ?—金のナノ粒子によってガラスをワインカラーに」と記すかも知れないと想像して、一人でうなずいている。

いずれにしても、伝統的なやきものやガラスの技術には、ハイテクとして注目されているナノテクとして然るべきものがいくつもある。このことは、ローテクを現在のハイテクで見直せば、伝統的な技法から新たにハイテクが生まれる可能性を示唆している。それは「ローテクのハイテク化?」、それとも「ハイテクのローテク化?」。

私がビジネスとするセラミックスは、メソポアと呼ばれる細孔、直径10nm前後の細孔が湿度を調整したり、オイルミストを吸着・分解し、脱臭する。また、水の中では放射性セシウムやストロンチウム、鉄や銅、クロムなどの重金属を吸着して浄化する。その特性と機能から見ると、ハイテクとされる「ナノセラ」である。

しかし、その作り方は、天然鉱物をそのまま使って通常の技法で成形し、850℃前後の低温で焼成するローテクである。言ってみれば、原始縄文人の技術である。

このローテクによるナノセラは、環境セラミックスとして大いに羽ばたく可能性を秘めている。21世紀は環境の時代でもあるから、ローテクの復活を宣言し、「縄文人と乾杯だ!」

### 三田村好矩 (F41、札幌市)

#### 「第3回ホームカミングデーに参加して」

2017年10月28日に開催されたホームカミングデーに参加した。正門に行事内容が掲示してあった(写真)。以下参加した感想です。

(1) 改めて建学の精神に感動する。

鵜飼裕之学長が式典の挨拶のなかで大学の原点である名工大設置時の経緯を紹介された。終戦後の新制大学設置の時、それまであった名古屋高等工業が名古屋大学工学部として編入される話があったが、初代学長となられた清水勤二先生は、「名古屋地区に帝国大学という意味の工学部ではない、いわゆるカレッジとしての実務に強い、プロの技術者を養成する工科系の大学の存在が絶対必要である、という信念を持っておられ」、この信念を強く主張され名工大が工学系単科大学として発足した。すなわち、実学重視の大学を目指された。この精神は、現在の名工大憲章、「ものづくり」、「ひとづくり」、「未来づくり」につながっている。

大学を卒業して50年になるが、改めて先人の心意気に感動した。

(2) 異分野での活躍、広範囲な分野の学習

今回の式典の司会をされたのは、NHK名古屋放送局アナウンサーの梶原典明氏。本学物質工学専攻の卒業生である。また講演(「グローバル化と総合商社」)をされたのは、元三井物産代表取締役の田中浩一氏、本学経営工学専攻の卒業生である。異分野でも活躍する人を輩出しているのは、多様な能力をもつ学生のためか(ちなみに北海道支部同窓生の菅沼宏之氏は医師である)。

異分野、広範囲な分野を習得した技術者が社会で要望されているため、本学に「創造工学課程(定員100名、6年制)が発足したのを学長の挨拶で知った。現在大学には5学科があるが、この課程に入学した学生はどの学科にも属さず、5学科を横断的に習得するそうである。4年次になる時に所属研究室をきめ、その研究室の属する学科の卒業生となるそうである。全く新しい制度で驚いた。

(3) 楽しかった懇親会

今回の懇親会ではテーブルが学科ごとに分けられていた。このため同じ学科の先輩、後輩から現役学生までいろんな世代の方と歓談することができた。ちなみに私は、計測工学科卒業で、その学科は既になく、その後学科の流れは生産システム工学科、理工学科と引き継がれている。鵜飼学長も計測工学科卒で同じテーブルで親しく話をさせていただいた。後輩の方で、スマホのメモにいろんなジャンルを100個書き出すことをしておられる方がおられた。例えば「映画」なら、見た映画、見たい映画などである。その中に「楽しいこと」のジャンルがあり、見せてもらったら411個あった。退職まであと2年とおっしゃっていましたが、楽しい人生を送られていると想像した。

ことしも楽しいホームカミングデーであった。



## 水嶋敏夫 (M42)

卒業後トヨタ自動車(36年間)、トヨタ車体に勤務され、現在名古屋工業会理事長です。勤務時には、いわゆる「かんぱん方式」と呼ばれるトヨタ生産方式の普及に努められました(ごきそ)

2017年3-4号より転載)。

## 秋山 秀雄 (Es43、東京都)

### 名古屋工業会 北海道支部の皆様へ

私は北海道支部に永く所属しており、毎年の支部総会では皆さんにお会いして楽しい時を過ごさせていただいておりますが、家族の事情により先般東京へ転居いたしました。現在は東京支部に所属しております。

ここに全く急な私の東京転出の顛末記を皆さんにご紹介させていただいて北海道支部からの転出のご挨拶にかえさせていただければと思います。

私には二人の息子がおりますが、長男は葛飾区西亀有に居住しておりました。この長男が6月下旬に社命により急にタイ国バンコクに転勤することになりました。長男には中2の娘、小2の息子の二人の子があるのですが、どうも長女の方が転校をいやがり東京に残りたいと強固に主張したようで、突然私達に上京して長女の面倒を見て欲しいという依頼が飛び込んできました。私達はびっくり仰天！。私達が東京へ行く方法についていろいろな案を検討しましたが、期間が4～5年と長いこと、私達の年齢を考えるとそう遠くない内に長男の近くへ移住しておいた方が良いと思われることなどを考慮して東京へ転居する決断をしました。最も悩んだところは札幌に30年弱も暮らし、たくさんの友人を持っているのにこれをご破算にして東京で新しい人的ネットワークを作り出すことが可能であるか・・・ボランティア活動でいろいろな役目を持っているのにこれを突然投げ出して良いのか・・・等寝汗をびっしょりかくくらい自問自答しました。

人間老いていくのは寂しいことですが”老いては子に従え”の教えにあるように時の流れははずれ自力ではどうすることもできなくなるのだと言い聞かせて東京移住を決心しました。

それからがまた大変。すぐに上京して賃貸MSを探しましたが、貸してくれるところが見つからないのです。部屋がいくつも空いているのに断られるのです。後で分かりましたが70歳も過ぎて高齢者になると今後のトラブルを警戒して貸し渋るのだそうです。

東京在住で著名な作曲家がやはり賃貸を断られて激怒し、結局購入した例があると不動産屋さんに聞かされました。支払い能力とは無関係だそうです。そのため7月上旬に再度上京してやっと賃貸MSの契約に至りました。ここは今年の3月にやはり海外転勤をされた方のMSで2年間の期限付きというものです。期限があるから高齢者でも借りられたのです。でも幸いなことにここは綾瀬駅から徒歩7分、孫の通学、塾通いも数分という私達には絶好の場所でとてもありがたく住まわせていただいております。

長男は8月1日に家族3人でバンコクへ赴任して行きました。

私達は地域に早く馴染もうと思い、区役所のボランティアセンターへ行って地域ボランティアを探し、私は小学校、聾学校、教会の子供食堂などで、家内は点訳の会に入会して活動を開始しており、友人も増えつつあります。偶然ですが足立区のボランティアセンターで応対して下さった方が、札幌市清田区出身でとても親切にいただき私達はとても心強くありがたく思いました。

さて、また話が飛びますが私達は現在期限付きMSに居住していますので2年後には諸条件(長男の家に近いこと、孫の通学が可能なこと、駅・買い物・病院が近いこと・・・)を満たす所へ転居しなければなりません。そのため転居後間もなく次の定住地の模索を始めていました。高齢なので安い中古MSを買って内装をやり直して住もうと考えて不動産屋さんと交渉しており、綾瀬駅から徒歩2分の中古MS(H12年築)を購入して内装を替えようと思いつつありました。9月中

旬に亀有駅徒歩4分の新築MS（2月に売り出してほぼ完売している）のモデルルームを内装の参考に見せていただこうとふらりと入って話をしていたところ「実は先日南向き3LDKが一户キャンセルになっています。」という情報を与えられました。167戸の内残りは東向き、西向きの部屋が6戸という状況で私達はそもそも中古ねらいでしたので、寝耳に水のような情報でした。実は駅側の中古MSは価格がほとんど下がっておらず、内装替えの費用を含めると新築と3%前後しか変わらないという状況でしたので、翌日すぐに購入の契約をしました。

従って12月下旬に再度引っ越しをすることになってしまいました。これでやっと終の住み家に入れると思うと随分安堵感がでてきました。

私は札幌で母と22年間一緒に暮らしましたが、母が90歳を超えたあたりからいろいろなことが混乱してきたようで（認知症ではありませんが）、結局母の貯金通帳などを全て私が預かり管理してきました。高齢化するとやはり肉親に頼らざるを得なくなるのだと思いました。今はお金を出せば何でも他人にやっていただけるとい時代でしょうけど、何と云っても肉親が側にいてくれて全てをまかせられるといことは身体が自由にならなくなった高齢者にとって最高の安心感だと思います。そのことを私が実感しているので迷うことはたくさんありましたが、今回長男の近くへ転居することを決断するに至った最大の理由です。

長くなってすみません。人生いつ何が起きるかわかりません。つまらない戯れ事になってしまいましたが、以上を持って北海道支部の皆様へのお礼の言葉に代えさせていただきたいと思えます。ありがとうございました。

#### **山平 英夫 (C43、札幌市)**

北海道庁に勤務しておられました。その後民間企業に10年間勤務され退職されました。近くに住んでおられたお孫さんの世話を楽しんでおられました。息子さんの東京への転勤にともない、お孫さんが近くにいなくなり、さみしくなったとのことです（「ごきそ」2017年3-4号より転載）。

#### **浅井 信和 (D45、更別村)**

##### **「年に1度の東京」**

十勝の田舎に移住してまもなく12年になります。

私の両親はすでになく、妻の母が栃木に健在なので、年1回会いに行っています。

するとどうしても通るのが羽田空港や東京都内の雑踏で、毎度のことながら人の多さに辟易します。ただ、いいこともあり、今回10月中旬に行った折には、雨の銀座でカフェタイムを過ごしたり、生誕120年東郷青児展を見たり（名古屋の丸栄デパートのエレベーターホールの壁画が今も記憶に鮮明です）、

東京都庁の45階展望室に登って首都の様子を眼下にしたりと楽しむことができました。

母の慰問と自分達の命の洗濯を同時にできるよい機会なので、今後も続けていこうと考えています。

#### **田上 利明 (C47、旭川市)**

現在、設計測量会社の会長をしておられます。健康維持のため、年間100回を超すゴルフを楽しんでおられます。同期会が愛知県西尾市であり参加され三河湾の美しい景色を楽しまれました。また蒲郡竹島まで387mの竹島橋を歩いて行かれたそうです（「ごきそ」2017年3-4号より転載）。

## 及川 善史 (M47、札幌市)

ホクレンに勤務の後、現在はホクレン肥料に勤務しておられます（「ごきそ」2017年3-4号より転載）。

## 赤澤 稔彦 (Y53、苫小牧市)

### 「近況」

簡単ですが近況を報告させていただきます。

昨年も近況報告でトレーニングジムに通っている事と連絡させていただきましたが、あれから1年続けて週2, 3回通っております。その甲斐あって10kg 痩せベルトの穴も2つほど絞る事が出来ました。テレビでは1か月で5kg、3か月10kg等のCMもよくみえますが1年半で10kgは自分では満足しております。

話は変わりますが来年1月にテニスの全豪オープン観戦に家内とメルボルンに行く予定で今から非常に楽しみにしております。真夏のオーストラリアですので昼間は避けてナイトセッションだけ予定しています。

年末は名古屋で高校の同窓会、大学時代の同級生の集まりがあり1年ぶりの名古屋の予定です。

## 佐川 正人 (C53、札幌市)

徳島県出身で清水建設に勤務しておられました。出光興産の仕事で北海道に来られました。退職後そのまま札幌お住まいになり、ISO や management の審査に関する仕事をしておられます。大学時代はワングル部に所属されておられ、現在は、登山やロードバイクを楽しんでおられます（「ごきそ」2017年3-4号より転載）。

## 浅野 一郎 (C54、札幌市)

金沢での勤務の後、札幌に転勤されて4年目です。息子さんが北海道大学に在学中ですが、息子さんとは適度の距離をおいて生活しておられるそうです（「ごきそ」2017年3-4号より転載）。

## 柴山 和雄 (W57、北見市)

### 近況

同窓生の皆様、こんにちは！

北見在住の芝山 (W59) です。

今年60歳の予備自衛官です。

酪農を営むために、こちらに移住してから、間もなく20年近くになります。新規就農で、東京ドーム25倍ほどの牧場を購入したので、莫大な借金を返済するため、当初は、お上に従い近代合理主義に基づく生産性の向上に邁進していました。しかし、遺伝子組み換えされた輸入飼料によるBSE・口蹄疫の発症で、家畜の命が無慈悲に抹殺されたり、化学肥料と農薬の大量使用による土壌汚染・生態系の破壊といった環境破壊は農業における現代の功利主義経済の弊害であることに気づかされました。

地球の生態システムの中で生かされている人類が、謙虚に環境に従って生計を立てるには、酪農においては放牧だと思い、

8年ほど前から試行錯誤を繰り返しながら、今日に至っています。

諸先輩方が、かつて産業の暴走が引き起こした公害を、科学と技術の力で克服したように、

農業が地球に対して健全に持続できるように努力したいと思っています。

皆様、よろしくお願いいたします。

## 山岡 千秋（ZW3、岩見沢市）

### 「作陶は、土に聴く」

こぶ志窯の工房であり、展示ギャラリーである「こぶ志苑」（岩見沢市5条東13丁目）は岩見沢市立東光中学校の隣に建っている。現在、山岡千秋さん（五十歳）が三代目を継いでいる。

昭和二十一年、祖父の三秋さんがこぶ志窯を開窯。良質な粘土も伝統や歴史もない北海道で奮闘努力を重ねて、焼きものの草創期を牽引した。周辺の愛好家は敬愛をこめて“さんしゅうさん”と呼んだ。窯業技術者でもあり、粘土を採取して素地も釉薬も自ら作るのがこぶ志窯流となった。「当時は経済的なゆとりもなかったでしたから」

千秋さんが工房二階の一室を案内してくれた。そこは各地で採取した粘土の入ったコンテナでうめつくされていた。壁の棚には使い込まれた大学ノートがずらりと並ぶ。釉薬の基礎試験の調査データだ。

現在は一線を引退した二代目の父の憬さん（七十九歳）とともに道内各地を歩きまわり、探し当てた粘土や石を実際に焼き上げた記録である。「釉薬として使うなら五、六十年分の在庫です。私の代で使いきれるか」と照れた。

初期のこぶ志窯は藍色が主流だったが、最近は釉薬の製品化作業も進んで豊かな彩の器が並ぶ。窯名は、初窯を焚いたときにこぶしが咲き誇っていたことにちなむ。ささやかではあるけれど、それから七十年の歳月が経った。

気どりのないものを作れ——という初代の言葉を思い起こすたびに「今、北海道の焼きものはなにか、と改めて問われている気がします」と千秋さんはいった。

「いつか道内原料だけの器を量産したいと思いますね」

（時の旅人、JR北海道社内誌、JR Hokkaido、September、2017より）





### **伊東省吾（ZX-17、札幌市）**

今回初めて総会に出席されました。北海道支部も会員の高齢化が進む中で、久しぶりの若い会員の加入で出席者全員から歓迎されました。平成 17 年材料工学科金属コースの卒業生です。北海道電力に入社され、火力発電所などの勤務の後現在、石狩湾新港に建設中の液化天然ガス火力発電所事業所に勤務しておられます。最近地元（北海道）の方と結婚されたそうです（「ごきそ」2017 年 3-4 号より転載）。